

星空と路 ギャラリートーク「それぞれの記録のかたち」

開催日時：2024年3月10日 10:00-12:30

ゲスト：高橋親夫、橋本武美、佐野友紀

聞き手：ほんだあい

進行：佐藤友理（せんだいメディアテーク）

佐藤：メディアテーク企画・活動支援室の佐藤と申します。「3がつ11にちをわすれないためにセンター（略称：わすれん!）」は、東日本大震災を受けてメディアテークが立ち上げた事業の名称で、市民や専門家、アーティストなど、さまざまな立場の方々が関わりながら、協働して震災にまつわる事柄を記録しています。この「星空と路（みち）」は、このプロジェクトに参加しているの方々による記録を紹介する場として、毎年3月11日の周辺に開催しています。

センターの名前に「わすれないために」という言葉が入っていますが、実はこれは「忘れないでいよう」というメッセージではなく、時間が経つとどうしても忘れてしまうし忘れたい人もいる、そういったことを前提に「忘れてもいいように記録をしませんか?」と呼びかけるためにこのような名前になりました。時間が経てば失われていくことというのは震災に限らずたくさんあると思いますが、その中で何を記録するのか、どうして記録するのかというのは、本当に人それぞれ違うのだと思います。今日は、それぞれ全く異なる形で記録をされている方々が来てくださっているのです、そのあたりについても聞いてみたいと思います。

それでは、ギャラリートークにご登壇いただく方々をご紹介します。1人目は、「3.11あときのホント」というプロジェクトに参加されている橋本武美さん。2人目の「『東北と復興』を考える」というプロジェクトに参加されている佐野友紀さんは、埼玉県にある自由の森学園高校を卒業したばかりです。3人目は「普通という風景」という展示で参加されている高橋親夫さんです。そして、今回私と一緒に聞き手をつとめてくださるほんだあいさんは、錦町で「喫茶 frame」を営まれています。今日はこの5名で進めていきたいと思いません。

それではまず、今回の展示についてお話を聞いていきたいと思いません。まず橋本さんから、展示について教えていただけますでしょうか。

橋本：3.11 当時は息子が10歳、小4でした。息子は知的障害があって自閉症で、なかなかコミュニケーションが難しかったり、皆さんと同じように行動ができなかったりする難しさを抱えていて、避難所に行くことはまるっきり頭の中にありませんでした。一般の方でも大変な状況の中で、自閉症の彼を支えながら、さらに特別な難しさがあったなと思いません。

そのあたりについて、当時は本当に日常がいっぱいだったもので何も発信することができずにいました。それを最近になって、あの時障害のある家族たちはこうだったのかな、ということがあれば避難所に行けたんだろう？とか、今だから話せる話をみんなに聞こうかなと。最初は発表するとかは頭になかったので、とにかくみんなの声をそのままレコーダーに入れようと。それが溜まった時点でどうしていくか考えようと思っていました。あとは元日に地震のあった能登とか、さらに遡って神戸とかでもいろいろなケースがあったと思いますので、ゆくゆくはそういう方ともつながりたいなという思いで、みんなの声をまず集めることを始めました。そうしたらちょっとしたきっかけがあり、メディアテークの「わすれん！」とつながることができて、声をそのままデータにできるんだと知りました。録音した後にグラフにまとめたり、苦手な文字起こしをしたりしなくても、音声のまま活かす方法があるかもしれない、一緒に考えていきましょうと声をかけていただいて、こちらにいる佐藤さんや他のスタッフの方たちの協力をいただきながら進めてきました。始めてからまだ1年も経っていない段階なので、こんな形で皆さんの目に触れるような展示をすることになるとは思っていなかったんですが、本当にありがたい機会なので、障害のある家族はどうだったんだろうとか、自分だったらどうだろうとか、他の地域でもまた災害時には同じように困ることになるので、そういうことをどう考えるかというのを、この機会に少しでも共有できればありがたいなと思います。

ほんだ：実は、私が働いている喫茶で行っていた震災に関する展示を見たことがきっかけになったと聞いているんですが、そのあたりについて教えていただいてもよろしいですか？

橋本：ほんださんの喫茶の隣にはSARP（仙台アーティストランプレイス）というギャラリーがあるんです。そこで、3.11の新聞をそのまま綴じたという展示があったんですが、そこでとてもショックな津波の写真とかを見ながら、ああ、こういうのをそのまま残しておくことってすごく大事だなと思ったんですね。私も当事者だし、仙台市民の皆さんにはそれぞれ体験があるけれども、そういうことを残すことはとても大事なんじゃないかなって。他の地域の方たちや、その後に生まれてきた方とかにちゃんとつないでるかな、私たちやってるかな？っていう思いがありました。その新聞がすごい存在感でどーんとあったのを見た時に、何かちょっとずつ始めてみようっていうきっかけをもらったのかもしれないです。

ほんだ：ありがとうございます。ちょっと話がさかのぼるんですが、一昨年に喫茶frameで息子のユウヤさんの書の展示をやっていただいたのが、橋本武美さん、そしてユウヤさんとのご縁だったんですね。その時にラジオの取材があったんですが、橋本さんがその取材の中で震災当時のことを話されているのを横で聞いていて、橋本さんの中にすごい思いがあるっていうことをひしひしと感じたんです。だから、新聞の展示を見ながら震災時の思いを聞いた時に、「やっぱり残していったほうがいいですね」と声をかけたと思います。そういう

ことがあったので、橋本さんがこういう形で作られていくのが、流れとしてすごいなと思います。

橋本：震災の時は本当に困ったんですよ。息子と2人でマンションの一室に缶詰にならないといけない状態があって、本当に大変だったので。皆さんそれぞれに大変だったと思います。沿岸部は沿岸部でとても辛い、悲しさがあつたりしたはずなんですね。私はどちらかというと、津波も来てないし、建物自体はほとんど被害がなかった人なんですけど、それでも大変だった。だけど、時間が経つてくるとやっぱりかすれてきてしまう。でも自分の経験したことって実は大事なことなんじゃないかなって。障害のある子の家族って毎日毎日が大変で、年齢が上がっても、例えば受験の時期でも20歳ぐらいの時期でもそれぞれに大変さがあるので、なかなかお手すきにならないんです。時間が取れない、それどころじゃないっていうような状況が押し寄せてくる。それが今はようやく少し落ち着いたので、いろんな方に助けてもらいながら、きっかけをもらいながら、自分でも発信するし、他の方のお話も聞いてみたい。そしてそれがものすごく大事な話だから、文字にまとめるのもいいけれど、できるならその会話をそのまま聞いてもらいたい。「わすれん！」ではそれが叶うということだったので、ぜひやってみたいと思いました。

ほんだ：「わすれん！」で活動を始めたきっかけとして、ちょうど今日スタッフで会場に来られている高橋和子さんという方と「録音小屋」で対話したことがあったと思うんですが、まず橋本さんがご自身の体験を人に聞いてもらって、どういう思いになりましたか？

橋本：私が初めて話を聞いていただいた高橋さんは、障害の関係の方ではないので、障害への知識がそれほどない方に伝えるつもりで話をしました。それでも「その話はとても大事なことなんじゃないの？」「聞いていてもっと知りたくなるし、もっと発信したほうがいいんじゃない？」というような後押しをいただきました。ほんださんの喫茶 frame でも、「録音小屋」でも、ちょっとずつそれぞれ後押しをしていただきました。

佐藤：いま「録音小屋」という言葉が出てきたので、少しだけ説明します。メディアテークの2階に「わすれん！資料室」という常設の資料展示スペースがあるんですが、そこに「わすれん！録音小屋」という小さな小屋がありまして、常時利用受付をしています。ふたりひと組で中に入って、「震災の時どうだった？」とか「あれからどんなことを考えてる？」といった話をして、それが自動で録音されアーカイブされるという装置なんです。この小屋に最初、高橋和子さんと橋本さんがふたりで入られて、橋本さんの震災当時の体験談を録音されました。せっくなので、当時の体験について少し教えてもらえますか？

橋本：私が震災時に困ったのは、飲料水でした。お水はお風呂に溜め込んであったので、ト

イレを流すのもお風呂の水を使っていたんですが、飲料水が足りなくて、でも給水車には並べない。当時息子は留守番ができない人だったので、私がひとりでどこかに行くことができなかったんですね。夫も仕事の関係で遺体安置所に詰めていて、家にはなかなか帰って来られなかったんです。私と息子とふたりだけで、水の確保をどうしようとなっても、マンションの8階に住んでいたのだから下に降りるのもちょっと怖い。エレベーターが使えないので非常階段を使うしかないんですが、降りている途中でまた大きな地震が来たら、アーって落ちて死んでしまうかもしれないので、1日1回だけ下に降りるとか、そういう方法をとっていました。水の確保は、最終的には、町内会長さんとか障害のことに理解のある方に「なんとかお願いできないでしょうか」って頼みに行きました。マンションの貯水槽みたいなところに水がキープされていて、最後の最後になったらこれを使うという分があったので、何とかそこからいただけないでしょうかと。町内会長さんはものすごく忙しく駆け回っていて不在だったんですが、そこのお宅の20歳くらいのお嬢さんに話したところ「私が行ってくるから大きいペットボトルとかある？」みたいな感じで、彼女が8階まで運んでくれましたね。そのへんも、私をもっとうまく発信できていれば、そんなに慌てなくてもいいことだったんだろうなって、だいぶ後になってから気づくことになりました。

そういう話を録音小屋で聞いてもらった体験が、私自身すごく癒しになりました。その後いろいろな方からお話を聞いた時にも、「あの時雪が降っていた」とか、「あの時こういうものを食べさせてあげたかったんだ」とか、相手の方も話しながらどんどん思い出して。話した後には、ちょっとすっきりした、言ってよかった、ストーンと落ちたものがあったって言っていただく機会もあったので、時間が経った今であっても、話すことがご本人の癒しになり、自分の中をろ過するような部分があるんだなっていうことにも気づかされました。

佐藤：橋本さんは、昨年5月にまずご自身の体験談を録音されて、その後は7人の方にお話を聞いていますね。それぞれ1時間くらいずつお話を聞かれたと思いますが……。

橋本：もっと長いですね（笑）やっぱり話していると、録音を切った後も話が止まらなくなる方が多かったので、皆だいたい2時間くらいですね。

佐藤：皆さん話しているうちに当時のことが思い出されて、どんどん話が膨らんでいったんですね。展示会場のモニターでは、それぞれの方のお話の音声から一部抜粋して字幕を付けた映像を流しています。隣には対話を全文文字起こしした冊子も置いているので、そちらもぜひ読んでいただけたらと思います。

橋本：ぜひぜひ。とっても貴重な記録だと思うので、お時間のある方は冊子もパラパラとめくって見ていただければありがたいです。

佐藤：それでは、次に佐野さんにお話を聞きたいと思います。佐野さんは「『東北と復興』を考える」というプロジェクトの展示をされていますが、その内容を教えてください。

佐野：自由の森学園高校を最近卒業しました、佐野と申します。私というよりは、授業のメンバーは30名ほどいるので「私たち」と言わせていただきます。私たちが行っている展示では、まず壁新聞があります。「石巻日日新聞」の、震災直後に新聞が印刷できなくなった際に大きな紙に手書きして貼り出していたというエピソードをモチーフにしている、私たちが1年間でどんなことを学んだのかを手書きでまとめて展示しています。2つ目が映像で、年度末に学校で行った学習発表会の様子を記録したものです。「東北と復興」のメンバーがどんなことを学んできたのか、スライドで紹介しながら生徒たちの言葉で説明しています。

佐藤：「東北と復興」という名前の選択授業があるということで、そういう学校は珍しいと思うんですが、自由の森学園高校では、生徒さんが興味のあるテーマの授業を選択して、1年間かけて学ぶんですね。現地に行ったり、自分たちで調べたり、人に話を聞きに行ったりして。

佐野：そうですね。

佐藤：昨年夏に、3泊4日で石巻にスタディツアーに行かれた帰りにメディアテークに寄ってくれて、そこで佐野さんに出会いました。その時、佐野さんがノートを持って近寄ってきて、「あなたにとって復興とは何ですか？というろんな人に聞いているんです」と、スタッフにも話を聞きに来てくれたんですね。佐野さんは、なぜその問いを立てたんですか？

佐野：私はこの講座を高2と高3の2年連続で受講していて、2度スタディツアーに参加して石巻を訪れたんですが、1度目に行って帰ってきた時に、復興って何なんだろうな、とふと思ったんです。関東にいと、毎年3月になれば「東日本大震災からの復興は今」みたいな見出しでテレビや雑誌で特集をするのが印象に残るんですが、実際に現地に行ってみると、街がきれいになったから復興なのか、でも地元の人たちはまだ復興という言葉が馴染んでいないのかなとか……大川小学校も見えてきたんですけど、実際に被害にあわれた方々やそこに暮らしていた方々の声を聞いて、本当にこれで復興って終わったのか？っていうような疑問が湧いて。復興って何なんだろうなってというのが、一番最初に石巻・東北を訪れて思ったことでした。自分で考えてもやはりわからなかったのが、実際にそこで暮らしている人・暮らしていた人などさまざまな立場の人に聞いてみようと思って、次の年にもう一度受講して、「復興って何ですか」と聞いてまわったのがはじまりです。実際に聞いてみると、「馴染まない」という言葉とか、「新しく作り直すこと」とか、一人

ひとりおっしゃることは全然違うし、それぞれの立場とかもあるんですけど、うーん……人に聞いてみて解決したかと言ったら全然解決してないし、まだまだこれから考え続けなきゃいけないんだなっていうふうに改めて感じました。たかが1人の高校生が2、3回訪れただけで復興という言葉の答えを導き出しているなら、もうとっくに誰かが導き出してるんだろうなとも思ったので、まだまだこれから、復興って何なんだろうっていうことを聞いてみたり、自分の中で考えていきたいなっていうふうに思っています。

ほんだ：この質問って、聞かれるほうにとってもすごく大きいものだと思うんですよね。自分が問われたら即答できるかって思うと、全然……。未だに「こうですね」とは言えないものがあるなと思います。佐野さんがお話を聞いた方々は、皆さん即答されていたのか、熟考して「ちょっと待って」みたいな感じになったのか、そのあたりも伺いたいんですが。

佐野：そうですね、結構悩んで、ゆっくり考えてから話してくださった方もいますし、即答してくれた方もいますし、中には「私には答えられない」っていうような方もいました。

ほんだ：ニュースとかでも復興復興って言われているけれど、問われると即答できなかったり、その人の中でも「復興って？」という問いが生まれると思うので、「高校生が2度3度行ったくらいで」とおっしゃいましたけど、何歳でもどんな人でも、常に問うていくというか……「昨日はこう言ってたけど今日はこう思う」という人もいるだろうし、佐野さんのそのまっすぐな姿勢を受けて「こう思ってたけどこうだったかも」と家に帰って思ったりとか。本当に日々変わっていくし、もしかしたらその人が友達に「自分はこう答えたけどどう思う？」と聞いたかもしれないですね。そういうのが生まれていくので、もっとどんどん聞いて行ってほしいなと思いました。印象に残っている答えとかはありますか？

佐野：そうですね……暮らしにあった回答っていうのがいくつかありまして、それはすごく印象に残っています。復興って、決して建物とか道路とかが新しくなったことだけじゃなくて、そこに暮らす人たちとか、もっと言えば遠くで暮らしている私たちの暮らしがより良くなる……あるいは、東日本大震災の被害を受けて、私たちみたいに被災地を見に来た人がどこかで被災した時に、その知恵が生かされればそれが復興だっていうような、その人自身に問いかけるような形のお話があって、それがすごく自分の中では心にきたというか、ガンって入ってきた印象はありますね。

佐藤：ちなみに佐野さんは、震災当時は何歳で、どこに住んでいたんですか？

佐野：4歳か5歳で、埼玉県の大宮で暮らしていました。

佐藤：当時の記憶はありますか？

佐野：記憶は結構あります。地震発生時は、近くの 100 円均一でおもちゃを買ってもらってレジでお会計をしているところだったんですけど、そこで揺れて、店員さんから「外に避難してください」と言われて外に出て、道路にあるポールみたいなものに捕まって揺れをしのぎました。電線とかもすごく揺れたし、これまでの経験の中で一番大きい地震だったと今でも思っています。

佐藤：当時の体験もすごくインパクトのあるものだったんですね。高校に入って授業で石巻に行ってみて、今まで考えていた東日本大震災の印象が変わったり、捉え直したりしたことはありましたか？

佐野：東北には一昨年に訪れたのが初めてでした。小中学校を通して、学校の授業では東日本大震災の津波の写真とかは教科書で見て学ぶので、僕の中ではやっぱりそのイメージが強いんですよ。テレビでも、東北と言えばやっぱり津波が流れてくる映像とか、まっさらになって津波で倒れた建物がポツンとあるみたいな印象が強かったんですけど、実際に行ってみたら、道は綺麗になっているし町も新しくなって、そこに暮らしている人もちゃんといて、本当にここで震災があったのかなっていうくらい綺麗になっていたんで、驚きました。

ほんだ：東北に住んでいる人が思う復興と、佐野さんが震災を体験した大宮とか、また違うエリアの人が思う復興って違うんだろうなと。東北の震災について、子どもの頃から情報としては知っていたけれども、実際に行ってみての体感が違っていたというのは、本当に興味深いなと思うんですね。2年連続で授業を選択されたのは、もっと学びたいという思いがあったからなんですか。

佐野：そうですね。もともと小学校の頃から東日本大震災自体にはすごく関心があって。当時ニュースとかで津波や原発の映像が流れて、親は見て驚いていたりするんですけど、自分はまだ何が起きているのか全くわからなかった。だんだん小学校とか中学校で学んでいく中で、あの時そういうことがあったんだというのは知識として入ってくるけれど、まだまだ何が起きたのかわからなくて、行ってみたいっていう気持ちはあったけど行動力もなかったんで、たまたま高2の時にこの選択講座ができて、自分がずっと知りたかったことに近づけるんじゃないかと思って受講したのが最初でした。実際に受講して行ってみたら、逆にわからないこと、疑問に思うこと、考えたくなることが行く前よりもどんどん増えていったので、たった1年で区切るの自分の中でも納得がいけないし、まだまだ考えたいなと思って2年目も受講したというのが理由です。

佐藤：この3月で高校は卒業しましたが、これからも引き続き東北に來たりしたいですか？

佐野：そうですね。授業を2年とってもまだまだ考えたいことも知りたいこともあるし、行ってみたいところとかもあるので、これからは学校として行くんじゃなくて、佐野友紀個人として、行ったり考えたりしたいです。それがお話を聞かせてくださった人たちに対して何か恩返しになるのかもしれないと思うし、自分がずっと求めている問いに近づけるのかなと思っているので、これからも関わりたいと思っています。

佐藤：ありがとうございます。続いて、高橋親夫さんにお話を伺っていきたいと思います。今回は「普通という風景」というタイトルで、震災前月の2011年2月に撮影された、沿岸地域の荒浜や閑上の写真と、当時の日記を展示しています。高橋さんにはこれまで、長年撮影を続けてこられた沿岸部の写真や、原発事故後の福島の写真なども展示していただきました。今回は今までとはちょっと違う展示になっていると思うのですが、内容を教えてくださいませんか？

高橋：私は生まれも育ちも仙台市宮城野区の高砂なんですけども、その地域の開発、都市化によって今までの景色がなくなるということから、昭和59年に記録をスタートしました。そして震災後も直後から写真で記録をしておりました。ただ今回の「普通という風景」は、これとはまた全く違うきっかけで撮っておりまして、その背景となったこととして、この写真を撮る前までは、一般的にネイチャーフォトと言われる写真のクラブに入って写真を撮っていました。そのクラブのテーマとして、人工物を入れない写真というものがあったので、泉ヶ岳のスプリングバレーから6kmほど奥の桑沼とか鈴沼とか、あと広瀬川の作並から上流を撮っておりました。ただ撮っているうちに、人工物を入れない写真というものに対してだんだん疑問を持ち始めまして、そのクラブから抜けました。それが2010年だったと思います。その後、私の日記によると2011年2月に京都造形芸術大学の通信の写真コースに入学を申請しまして、受理されました。そして、これからどんな写真を撮って行こうかと考えていた時、今までは山を撮ってきたから、今度は撮ったことのない海を撮ろうということで、荒浜などに行きました。写真を撮るための体力をつけようという意図もあり、荒浜から藤塚までかなり距離があるんですけど、海岸を歩きながら撮り始めました。そうしているうちに3.11が來たわけですね。それが今回の「普通という風景」の写真です。写真の他に日記も展示していますが、あの日記は2011年2月1日からつけはじめたんです。当時63歳だった私は、これから毎日流されないで日々大事にして過ごしていこうということで、日記をつけ始めました。そしてどんな時代に自分が生きているかということを記すために、新聞記事の見出しとか、その時に起こったことなどを日記と一緒に書きました。日記は当日で

はなく次の日に書くことにしました。これからだんだん記憶力が低下していくだろうから、記憶力のチェックという意味で次の日に書くことにしました。過去には鉛筆の手書きで日記をつけようと何度もトライしましたが、それは3日坊主でした。パソコンで書くようになって、文章を訂正したりできるようになったことで続けられるようになり、昨夜まで続いております。

なぜ日記を始めたのが2月1日だったんだらう、それから、なぜ今まで行ったこともない荒浜を撮影しに行ったんだらうと、すごく不思議に思います。震災が来るなんて予期していないわけですから。いろんな個人的な事情でやってきたことが、自然災害とクロスしたんだらうなど。日記には、震災前の日々はどういう暮らしをしていたか、それから震災後の日々の記録、当時町内会長として避難所の運営に携わっていた日々の詳細が記録されてます。そして、昭和59年に高砂の都市化をきっかけに記録した写真が、津波被害のあった地域の震災前の写真だということで、写真が欲しいという引き合いがかなりありました。その経験から、彼らにとって写真とは何なんだらう？ということはどうしても考え始めるようになりまして、やがてそれが福島のように繋がっていきました。ただ撮りっぱなしではなく、きちんと資料化しないと誰も見てくれないし価値がないということで、記録して整理してきたわけです。

佐藤：特別なものではなく、地域の日常の風景を撮ってこられたわけですが、その地域が被災したことによって、多くの方が震災前の写真を求めるようになり、とても不思議な体験をされたということですね。

高橋：そうですね。昭和59年に撮り始めた時は、私以外は誰も、記録として残そうという気持ちはなかったんですね。でもそれは当たり前なんです。特別感動的な、記念的な写真でもないしね。周りの人にとってはいつもある風景で、何でそんな写真撮るの？っていうような気持ちだと思います。なぜそれを私が撮ったのか、心当たりとしては、職業的なものから来てるんじゃないかと。私は建築の現場管理関係の仕事をしていて、工事検査を受けたり、品質管理、工程管理っていう仕事があるんですけど、どんな材料を使ってどんなふうに工事をしたか、全部記録するわけです。それが検査の時に1つの証明として出されます。後からでは撮れないんですよ。だから、誰もやってくれないんだったら自分でやるしかないと思った。自分にとっての故郷が一番大事なので。文章なんか書けないけど、シャッターを押せば写る、それでやっていこう、今しかない。時間はどんどんせまってくる。やらなければ残らない。あとになって、あの時に撮っていればと後悔するのは嫌だなと思って始めたのがスタートですね。

佐藤：高橋さんが震災前に撮られた写真をもとにして、震災後に別の人がその場所をあらためて撮影した定点観測写真などの記録も「わすれん！」にはあるんですが、それも高橋さん

が写真を撮っていなければできなかったことで、すごく貴重な記録ですよ。

高橋：不思議なことに、時間が経つことによって写真の意味が変わってくるんですよ。時間とかいろんな変化によって、自分の意図とは違う価値がついていくような感じね。そして欲しい時に写真は無い。

佐藤：高橋さんご自身のそういった経験が、福島の写真に繋がっているんですね。少し説明をしますと、原発事故後、避難指示が出て人が住めなくなった浪江町で、2017年3月に避難指示が一部解除されるという報道が出ました。高橋さんはその時、解除されれば建物が取り壊されたり新しく建ったりして、町が一気にガラッと変わってしまうだろうと予見して、解除前から解除後にかけて町の変化を撮影するために、ほぼ毎月浪江町に通われました。その後は双葉町にも通われて、計1万枚ほどの写真を撮られています。それらは全て、いつ、どの位置から、どの向きで撮ったかがわかる状態で整理されています。高橋さんはもともと福島にゆかりのある方ではありませんでしたが、避難している方々は日々の生活が大変で記録どころではないだろうから、誰かが残しておかなければということで……何回くらい行かれたんですか？

高橋：100回通いました。きっかけは、ある時バスに乗っていて、常磐道を通って福島の浪江あたりを通った時に、ガイドさんが「ここが原発で被災した町です」と説明したんですね。仙台のほうはだいぶ復興が進んでいて、気分的に明るかった頃です。

佐藤：2016年あたりのことですか？

高橋：そうですね。その時に見た風景は、真っ黒でした。テレビや新聞で報道はされているけれど、隣の県ですごいことが起きているのに、自分は何も知らないんじゃないかと衝撃を受けました。次の日にすぐ、町の状況が見たかったので高速道路は使わずに一般道で、浪江町に行きました。そこで見たものは、すごかったです。とても写真を撮る気にはなれなくて逃げ帰りました。正直圧倒されて。それからが始まりでした。その後、避難指示解除の半月前に、そのニュースがありました。解除されて人が戻ってきたら、写真は撮れるだろうか。福島に限らず地元高砂もそうですが、誰も撮る人がいないわけですよ。お前何やってんだ？って、不審者ですね。だから、人がいない朝に行って撮る。だから人が写ってないんです。福島もそうでした。お前何やってんだって言われるんじゃないか、そのことに自分は耐えられないんじゃないかと。警察官、パトカーには4度ほど職務質問をかなりしつこく受けました。だから1つだけあったコンビニに車を置いて、カメラだけ持って、絶対道から外れないと。物取りじゃないよと、カメラだけ持って、そして歩きで全部回りました。そういう経験をしながら福島を撮りました。

佐藤：誰かに頼まれたわけでもなく……本当にものすごい活動だと思います。その 1 万枚の写真は、過去にこの「星空と路」でも展示をしていて、その時に全てプリントアウトしてアルバムにまとめました。メディアテークの 2 階にある「わすれん！資料室」というスペースにそのアルバムと地図を置いているんですが、時々ご地元が浪江町だという方から「家の近所が写っているから写真をもらえないか」というようなお問合せをいただいて、写真をお渡ししたりしています。とはいえこのアルバムのことはまだまだ知られていないので、浪江町や双葉町の写真を探している方がいらっしゃれば、メディアテークにご一報いただきたいと思っています。

そして先ほどのお話にあった通り、今回展示しているのは震災後のものではなく、2011 年 2 月の日記と沿岸部を撮った写真で、震災前の日常が綴られているものです。「星空と路」は東日本大震災の記録を紹介する場ですが、震災前にあった日常を思い出すことも、震災を考える上で大事なことなのではないかということで、今回はこうした展示にさせていただきました。

3 名の方に一通り展示についてお聞きしたので、ここからはざっくばらんにお話ができたらと思います。皆さんそれぞれに違った形で記録をされていますが、お互いのお話を聞いてみてどうでしたか？

橋本：私は高橋さんの福島の写真を別のギャラリーで拝見したことがあるんですが、大きな地図で貼り出された記録を見て、やっぱりすごいなと。写真に人は写っていないけれども、福島で起きていたこととか、思い出すことがいろいろあって。特別な写真として受け取るものがあって、それは皆さんにやっぱりいろんなタイミングでご覧いただきたいなっていう気持ちがあります。あと佐野さんは本当にすごいなと思ひまして、当時をあまり知らない方、被災地にいなかった方が「復興って何ですか」って問いかけることってすごく大きくなって。私がふっと聞かれたらさらっと答えられないんですよ。それは体験しているがゆえのこともあるけれども、これからもどどんいいろんな人にいろんな場所で投げかけて欲しいなと思ひました。すごく大事なことだなって。逆にもっとみんな、被災地の高校生とか若い人たちもやっぴいんじゃないかなというふうに思ひました。

佐野：橋本さんの話を聞いて、被災された方の中に、そういった障害を持つ方もいらっぴったということを知りました。ただでさえ日常生活から一般の方とは違うのに、さらに震災があっぴて苦しい思ひをされたこと、その水の経験とかは聞いたことなかったので、そうした経験を受けて実際に今のような行動を起こすというのはすごいことだと思ひました。高橋さんの写真も先ほど拝見したんですけど、たまたま撮った写真がこうして意味を持つことになるのは不思議なことだなと思ひますし、日記を讀んでいても、普通の日常のことが書かれていて、それがたった 1 日の出来事によって貴重なものになっぴたというのは、いいこ

となのか悪いことなのかは一概には言えないですけど、それほど影響があるというのが自然災害なんだなと感じました。

高橋：橋本さんの展示を拝見しまして、すごく貴重な、橋本さんならではの、橋本さんにしかできないことをやってくれたんだなってすごく思いますね。なかなか表に出てこないことをこのような形でまとめられたのは、すごくいいことをやられたなって本当に思います。それから佐野さんですけども、若い人がね、こういう災害をいろんな形で取り上げてくれて、私たちにとっては嬉しいですね。そして、私たちは経験したことについて聞かれる立場じゃないかなと思うんですね。ぜひ質問していただければと思っています。

ほんだ：記録をするきっかけや方法、写真だったり音声だったりっていう三者三様の違いがあったと思うんですけども、それぞれの方のお話を伺って、今後取り入れたいとか、この部分は自分もあるとか、そういう面もあったりしますか？ 橋本さんは音声の記録をされてきましたが、他のやり方も聞いてみて、こういうふうにしたくなっていうところとかはありますか？

橋本：写真ってやっぱりものすごく力があるなって。視覚的に力があるものですよ。そして音声もまた、違う形で心の中に入ってくる部分がある。今回、会話をそのまま音声で残すかたちをとらせてもらったので、それが割と心に響く部分があるような気がします。できることなら、私はこのままの形で続けていきたいと思っています。

ほんだ：今回展示を見させていただいて、手書きの文字と抜粋の部分がすごく読みやすかったし、伝わりやすく、入りやすかったです。

橋本：それはすごくありがたいです。嬉しいですね。発表するとか展示するっていうことを頭に入れて始めたわけではないので、そのへんは本当に「わすれん！」の佐藤さん、白川さんとかスタッフの方々と、どういうふうに展示すれば気に留めてもらえるかな、見てもらえるかなって相談しました。音声全部を流しても内容が伝わりにくいので、これはキーワードだなって思うことをピックアップして、その部分の会話が流れるような形の展示にしてもらって、すごく良かったなと思います。なので、私の展示っていうことではなくて。

ほんだ：みんなで作って。

橋本：そうです。これからも続けて行きたいなって思います。

ほんだ：高橋さんの「普通という風景」というタイトルを見て、普通って何だろうって改め

て思ったりしたんですけれども、このタイトルに込められた思いはありますか？

高橋：年を経るとどんどん、「普通」は静かに変化していくんですよね。人間も周りの環境も全てどんどん変化していく。だけど写真や映像や音声や文字で書いたものは、そこで止まるわけですよ。それが記録するってということなのかなと思いますね。普通というのはどうということなのかなって。それでこういうタイトルをつけたんです。

ほんだ：そうなんです。お店でも、高橋さんがよく来てくださってお話を聞かせていただいているんですが、今回のテーマのことも、「無常だからね」とおっしゃっていたことがあって、「え、無常って何ですか」って聞いた時に、諸行無常という言葉だったんですよね。変わっていくのは風景だけではないっていうお話がすごく印象に残りました。

高橋：まさしく、難しい古文の話じゃなくて、この年になると実感しますね。1つとして止まっていない。止まっているのは写真とか文章で書いたもの、音声もしかりだと思うんですけど、そういうものだなって思いますね。どんどん変わっていく。そして予測しないことが起きてくる。私の撮った震災前の写真を見たある女性から、「高橋さん、震災が来るのを知ってたんでしょう」って言われたことがありますけど、当然そんなことはないんですけど、不思議な感じはしますね。

ほんだ：「無常だからね」という言葉を聞いてから、毎日が変わっていく中で記録していくものって何だろうとか、いろいろ考えたりしたんですよね。すごい深い言葉だなあと私は受け止めさせていただきました。

高橋：別なものになっていくっていう感じですね。当初意図したものとは違う、時間とともに別な価値になっていくというような感じはしますね。

ほんだ：思いがけず次の月に震災が起きて、高橋さんが撮ったものや書いたものがいろんなところに伝わっていくことでいろんなアクションもいただくでしょうし、やっぱり喫茶でも「不思議だね」という話をして。記録ってそれぞれありますけれども、誰でもできるわけではない気がしてるんですよ。メモ程度だったらちょこちょこっと書けるんですけども、人に伝えるまで整理されて記録となっていくというのは、誰でもみんなができることじゃないことをやっていらっしゃるなという印象があります。

高橋：なぜ地図に書いたりするかというと、そういうふうにある程度整理して資料化しないと、全部ゴミにされるなど。やっぱり時間とかお金とかいろんな労力をかけないと大事にしてもらえない。でも資料化すれば、誰かが大事にしてくれるかもしれない。ただのやりっぱ

なしではただのゴミじゃないかと思うと、どうしてもそうしたくなるんですよ。あと記録も、誰かが今やらないと残らない。誰もやってくれない、ということですよね。頼まれごとじゃできないですね。

ほんだ：ご自身が建築の仕事をしているからっておっしゃっていましたが、建築の仕事をしているからといって皆さんがそれをやれるわけではないので、それは本当に高橋さんが持つものですよ。3人のお話を聞いて、皆さんすごく熱があって、熱がないと残そうってところまで行かない気がしたんですけど。佐野さんも小中の頃から震災のことが気になっていて、高校でやっと学べるという思いがあったというのは、すごく興味深いなって思いました。1年やって2年やってもまだまだ謎が深まるっていう点では、すごい熱意があって今後も続いていくんだろうと思ったんですが、どうですか？

佐野：うーん、自分がただ単に知りたかったっていうか聞きたかっただけで、自分でこのノートを……普通に授業で使ってるノートなんですけど、そこに、いやこれ絶対忘れちゃいそうだなって思ったことを自分用に書いただけなんです。それをこうやっていろんな方々に見てもらうっていうのも何かの縁なのかなとは思ってますけど。熱っていうか、やっぱり関心や興味がすごくあって。自分の中では「あの時何があったのか知りたい」というのが先にある。大変なことが起きてるっていうのは周りを見れば一発でわかるけど、じゃあその時どんなことが起きて、どんな人がどんな行動をとったのか、どんな考えが生まれたのかっていうのは、私の場合は後から知ることしかできなくて。だんだん知っていくことはできるけど、そこで生まれた疑問とか考えはそこで終わるものではないし、実際に見に行ってもそこで満足するっていうのも……。最初はこのノートをとったり、話聞いてそれで満足していた自分もどこかにはいたんですけど、ただ行って聞いて知った気になっただけでは、まだまだ自分にはわからないし、そこで終わったらダメなんだなっていうのは最近はずっと感じています。

ほんだ：終わったらダメなんだなっていうのは、どんな気持ちなんでしょう？

佐野：言葉で表すのはすごく難しいですけど、他者の言葉を聞いてそこで終わるっていうのは、自己満足になっちゃうとか、もったいないとか。その先に何かあるかもしれないし、それを受け取って自分には何ができるのかを考えたいです。「復興って何だと思えますか」という問いへの答えとかは、やっぱりもらったからには返すとか、応答するとか、そういうことはしていかなきゃいけないだろうなと思うし。ただ受け取って満足しちゃう癖が僕にはあるので、そこで止まるのはダメだっていうのは自分でも思うし、教員の方に相談している中で言われた言葉でもあります。

佐藤：佐野さんのように、当時はまだ子どもだったので状況がつかみきれず、モヤモヤとかわからなさみたいなものを抱えてきた方がたくさんいるのだということ、最近、子どもだった方が大人になって発信をされるようになってから知ることが多くて。実は今回の「星空と路」の展示の中でも、当時子どもだった人たちの語りが、3つのプロジェクトで展示されています。自由の森学園の佐野さんたちの展示は、当時子どもだった人たちがあらためて学ぶような形になっていると思うんですけど、お茶の水女子大学の学生さんたちの「映像を見て、言葉を紡ぐ」というプロジェクトでも、当時小学生で、多くは東北から距離の遠いところに住んでいた方たちが、いま震災の記録映像を見て、わからないなりに語ろうとする対話の記録が展示されています。また、会場入口近くには、仙台市の荒浜小学校出身で、当時は小中高生だった方たちが、十数年経ってこれまでを振り返りながら、いま考えていることや感じていることを語った映像とテキストを展示しています。この「星空と路」は2012年から開催していますが、時間が経ったからこそ生まれてきた記録があったり、記録できる人が新たに増えていたりしていることを、佐野さんのお話を聞いて改めて実感しているところです。

会場から、もし3人の方にご質問などあれば、挙手でお知らせください。

来場者 A：作った記録をご家族にちゃんと伝えるとか、そういう意志って持ってますか？つまりは自分が死んだらこれはどうなるだろうって考えたことはありますか？

橋本：3.11があったけれども、その後も地震だけでなく水害とかで避難所に行ったり、そういうことは日本中でいつでも起こり得ることなので、やっぱり残したいなって。私はこうやっているんな方に話を聞いて回っているけれども、それはメディアテークに音声で残りますので、また誰かが同じようなことを……うちの息子の場合は発達障害や自閉症だけれども、また違ったバリアを感じている方が始めるかもしれない。この発信によって、私もやってみようとか、普段疑問に思っていることをぶつけていいんだとか、そういうきっかけをちょっとでも受け取っていただければいいなと思います。

佐藤：ちなみに「わすれん！」は震災アーカイブ事業ということで、アーカイブにも重点を置いておまして、記録をされた方とそれぞれ権利許諾を取り交わした上で、記録をデータベースに保存しています。佐野さんはどうですか？

佐野：僕の場合は興味を持つ側で、自分が何かを発信するというよりは、ずっと教えてもらう受け身の側だったので、そういうことは全く考えたことがなかったんですけど。でもこれから自分と同じように、復興って何だろうとか、震災について興味があるとか、いろんな人が震災について考えていく中でのきっかけの一つとしてあればいいかなというような感じで思ってます。

高橋：私の場合は、昭和 59 年から記録した高砂地域の写真については、原本は全部仙台市博物館に収めてあります。震災後に求められた写真については、そのコピーを被災された方にお渡ししてありまして、それをどういうふうにするかは、お渡しした先で考えていただければ、というところなんです。あと福島記録については、全部双葉町の伝承館に納めさせてもらいました。それをどういうふうにするのかは、福島の皆さんが考えてくださいということで、お渡ししてあります。あと個人的ないろんな記録というのは自宅にありますけど、それはどうなるかは……私も親のいろんな資料とかはだいぶ処分してしまったんで、いずれそういうふうになっていくんだろうと思います。でも、先ほどもちょっとお話ししましたように、きちっとそれなりに整理されたものであれば、誰かが大事にしてくれると思っています。

佐藤：たしかに、この仕事をしながら実感しているのですが、いつ撮られたかわからない、どこで撮られたかわからない写真は、もらっても使い道がないということが正直ありまして、すごく貴重な記録でも、死蔵してしまうということがあるんですね。高橋さんの記録のように整理されていて、いつどこで撮られたものかわかる状態になっていけば、すぐには使い道が見つからなくても、何十年後かにまた別な人が使い方を見出してくれるかもしれない、そういうことも見据えて整理されているんですね。

来場者 B：普通にご出演の方々に質問するところなんですけど、私からの質問は、あえて主催者であるメディアテークさんに向けてなんですけれども。この 13 年間の「わすれん！」を中心にしたメディアテークさんの働きを本当に感心しながらずっと追いかけてきました。映画から展示から、いろんなものを拝見して、いろんな学びをさせていただきました。今日のような記録のことも大きな仕事としてあって、ずっと続いていくとは思いますが、私はやっぱり社会の変化、そして震災から 10 年も 20 年も経っていく中で、メディアテークさんの仕事の役割とか、立ち位置や手法も変わっていくだろうと思っていて、そのへんをどんなふうに見据えていらっしゃるか。今日はスタッフの方が何人もいらっしゃるんで、どなたからでも結構なんですけど、お願いします。

佐藤：時間が経つにつれて仕事が変わっていくというのは本当にその通りで、今回実は毎年行っている上映会がありません。一概には言えないとはいえ、震災直後であれば、例えば被災した光景を映像に撮ったり、記録すべきものが目の前にあるような状態があったと思うんですけども、時間が経ってきて、目の前に一見して記録の対象がなくなってくると、当時の語りを聞くとか、思い出して振り返って書くとか、そういった振る舞いの記録が増えてくるんだなというのは、今日の皆さんのお話を聞いていても感じる場所です。そのようにして、映像記録が数多く撮られるような状況はやはり減ってきていて、ここ数年はインタビ

ューや手記などの記録が増えています。それによって、これまでは上映会を行った後に、映像を撮った方のお話を聞くアフタートークというのをやってたんですけども、今回はそうではなく、音声で記録したり、書いたり、写真を撮ったりする方にもお話を聞いてみたいということで、このようなトークをしています。集まってくる記録の内容も変わってきたり、時間が経ったことで若い方が記録を始められたり、さまざまな状況が変わっていく中で私たちがすべきことも変化し、対応しながら進めている中で、今後どう変わっていくかを見据えるというのはなかなか難しいことではあるんですが、少なくとも10年経ったからもう終わりとか、20年経てば終わりということではないんだということは、とても実感しています。例えば橋本さんも十数年経たなければ動き出せなかったという状況があったと思いますし、心情的にまだ向き合えない方もいらっしゃる、もっと時間が経ってようやく考えたり動いたりできるようになる方もいらっしゃるはずで、いつ関心を持てるかということも本当に人それぞれなんだろうと思うので、とにかくそういった方に門を開き続けるということだけは決めています。中身をどうするかということは常々話し合いながら変わっていることではあるんですけども、関心を持った時にも誰でも触れられるように記録を保存し公開して、活動も受け入れるという体制はずっと続けていきたいと思っております。

来場者 C: お話を聞いていて、3.11をもう1回考えるいい時間になったなというのが一つの感想なんですけど、一番最初に「忘れない」ということについての話があって、この間あるテレビ番組を見ていたら、ウクライナの侵攻があった時には人々の関心がウクライナに向き、しばらく経ったらガザの問題が起きてパレスチナに関心が向き、そして今年になったら能登の方に関心が行くと。人の関心っていうのはいつも移ろい行くわけですよね。そういう中で、例えば3月11日は忘れない日で、3月10日はどうなんだと。あるいはもうちょっと遡ると、2.11っていうお話もありましたけれども、こうやって考えると3.11も3.10も、ある種人々にとっては等価なんですよね。ある人にとっては3月10日は東京大空襲の日だと。それを自分のメモリーとして忘れない人たちもいるわけですよね。これって何だろうってずっと自問をしながらお話を聞いていました。こんな時に結論を言うあれではないんですけど、普通って何だろうっていう今の問い返しもあったわけですよね。「てつがくカフェ」の言葉で言うと、普通って日常と非日常ということなのかなと思ったんですけど。僕らは圧倒的に日常を暮らしているわけですよね。その日常の中にある矛盾が、ある日突然非日常がやってくると、普段は見えていない、見えないんだけど見えてしまうっていうか、結局僕らの普通——この平和の暮らしの中にあっても、それでもやっぱり社会の中にはいろんな問題があって、それをきちっと照射していくっていうか、日常の中にいろんな矛盾があって、例えばコロナなんかでもそうですけど、誰だって感染症にはかかるけど、でもその中で一番被害を受けた、皺寄せを受けた人は誰なんだろうかみたいな、そういう想像力をやっぱり僕たちは日頃養っていかなくちゃいけないかなっていうことを、今日の1時間半ぐらいの間でいろいろ考えることができたので、非常に感謝しています。それにしても、何だろう、

僕たちの日頃の生活が問われてるんだっていうことをやっぱり考えていかないといけないんだっていうこと、僕にとっては今日がまた忘れない日になるかなと、そんなことを感じました。感想ですみません。

佐藤：ご感想ありがとうございます。今のお話を受けてどうですか？

橋本：やっぱり、普通って何だろうって。私の普通は皆さんと違うだろうし、地域ごとにも違う、福島の普通って？とかね。やっぱりその想像力は常に持ち続けていなきゃいけないっていうことも、少し今日感じ取ることができました。若い方から刺激をもらったりとかね、とても今日学びになりました。

佐藤：最後に一つだけ、皆さんにお聞きしたいんですが、これからしてみたいことはありますか？

橋本：私はこれまでと同じようにマイペースで、同じ立場の、発達障害とか知的障害がある方たちの当時語れなかったこととか、普段はなかなか言いにくいこととかを聞き続けていきたいなと思います。あとは特に女の人とかがって、すごく日常に流されてしまう、日々のやることに流されてしまう部分が多いと思うんですけど、少しだけ自分を大切にすることができればいいかなって。それは自分に思っています。

佐藤：佐野さんはどうでしょうか。

佐野：いろんな人の考えとかお話を聞かせてもらって、それを得て自分がどう思ったのかとか、自分が考えたことを、これが答えだっていうふうにはしたくはないんですけど、葛藤とか更新されていくものも言葉にすることができたらいいのかなっていうふうに思います。あと私は岩手県に行ったことがないので、岩手県の今も見に行ってみたいなっていうのはあります。

佐藤：ぜひ行ってみてください。では高橋さんお願いします。

高橋：復興という話からですけども、震災後に見たものは、仙台沿岸もそうですが、朝6時になると建設機械のエンジンがかかっているんですね。そして7時頃からもう仕事を始めているんですよ。日曜日でも何もありません。仕事柄どうしてもそういうことに関心が行くんだらうと思うんですけど。そして全国から集まってあの延々と続くものを復興させてきた、人ってすごいなと。それから福島で見た光景ですね。全国から集まって、汚染されたいろんなものを、まだ放射線が残っている中で働いている人たちがいっぱいいた。ああ人間ってすご

いなくて思ったことを、やっぱり話したいなと思いました。それから、そういうところに身を置いて自分がどう感じるか、そういうものをこれからも続けていきたい、大事にしていきたいなと思います。

佐藤：ぜひこれからも見せてください。ほんださん、最後に一言ぜひ。

ほんだ：今回「それぞれの記録のかたち」というタイトルだったんですけども、本当にさまざまだし、残したい、伝えたい、そういう欲求が、さっき熱とも言いましたけど、いろんなものにまとめられて手渡されて広がって、これから何年も続いていくのかなど。あとは佐野さんのように、震災の時若かった方の記録や知りたいと思うことが、今後何年経っても続いて残っていけばいいなと、話を伺ってとても思いました。

佐藤：ありがとうございます。これでギャラリートーク「それぞれの記録のかたち」を終わりたいと思います。皆さん、ご来場いただきありがとうございました。